

論文の内容の要旨

論文題目 ドイツ観念論における超越論的自我論
----- 大文字の〈私〉

松本正男

本書は、かつてドイツ観念論の思想圏において出現した超越論的自我論のひとつの系譜を追求し、それを今日の哲学的思索に寄与し得る生きた遺産として保全する試みである。

序言で本書の方法（論証的再構成）に言及した後、第一章では、本書の主題となる「超越論的自我」の何たるかが提示される。それは、私的心象を超えた実在的世界への相関性の故に、非人称的に "Ich" と大文字で語られてきたものであり、実在的世界はこの Ich との相関においてしか存在を得ない。フレーゲは、新カント派の流れを汲んで、「思想」の担い手として「精神」一般を考える側面を持つが、「精神」一般は我々の Ich と重なり合う。我々は我々の Ich において「思想」を捉えるが、それは構成要素として対象に関わる機能部分を含み持ち、そこで世界への関わりを確保する。カントが提示した「カテゴリー」、「原則」は、この関わりの必要条件として解釈できる。本章第二節は、カントが、知の問題との関連で、前批判期の形而上学的自我論を経て、批判期において超越論的自我論を語り出す過程を叙述する。それは、知の成り立ちを

説明し得ない立場から、説明し得る唯一の立場への移行である。カントは、超越論的自我論の地平において、客観的眞偽の決定可能な場所、すなわち我々が対象と出会う経験の場所を、その可能条件の析出によって境界区画する。この Ich、あるいは超越論的自我という考えは、ドイツ観念論において、カントの「超越論的統覚」論のさらなる展開として豊かな内実を呈示するに至る。

第二章は、カントによって提出された〈超越論的自我〉概念が、彼の思想的継承者、ラインホルト、フィヒテによってどのように精錬されていったかを明らかにする。超越論的自我論のドイツ観念論における継承は根元哲学から始まる。その基礎をなす根本命題は「意識律」であり、「反省」によって到達可能な意識の「事実」を直接的に表現する。しかし「反省」概念には曖昧さがあり、そこに窺える方法論的考察の欠如の故に、根元哲学はシュルツェのヒュームの懐疑論に攻撃されて、哲学史の舞台から消え去っていった。フィヒテの知識学は、根元哲学と懐疑論に共通の前提、すなわち哲学の出発点は「事実」にあるという見解を否定することによって、両者の対立地平そのものを超えようとする。「事行」は、自足的根本命題の上に学問の全体を建設するという根元哲学の体系構想の影響下で、定理としての「事実」を基礎づける公理の役割を担って導入された。しかしその体系構想に忠実である分だけ、自我の絶対的活動を表現すべき第一根本命題は「統制的」妥当性以上に至り得ない。知識学本来の思想に従えば、「事行」は超越論的自我の対象媒介的な反省構造として、理論的・実践的世界を導出する知識学全体の論証に併せて、「眞実の生」を生きる実践において直証的に確認されるのでなければならない。我々の生のあり方も巻き込んだ知識学のこの循環的構造と、根元哲学に影響された初期体系構想は不具合をきたすが、その後、知識学は「事行」という術語をほとんど用いず、本来の思想により適切な別の叙述形式を探し続ける。

本書は、以降、ラインホルトからフィヒテ知識学へ展開する超越論的自我論のこの流れをさらに先まで明らかにするとともに、知識学批判において知の論理に関する別方向の思索を批判基盤とするヘーゲルに目を向け、ドイツ観念論の超越論的自我論を、彼らに見られる二つの契機において追求する。

第三章は、次の二章で論述されるヘーゲルとフィヒテの超越論的自我論を対比的に特徴づける準備作業として、ヘーゲルのフィヒテ批判の妥当性を、フィヒテの思想的変遷に沿って検討し、「絶対知」論をめぐる両者の眞の乖離点を明確にする。ヘーゲルのフィヒテ批判には、心理主義批判、図式主義批判、形式主義批判という異なった要素が含まれているが、ヘーゲルはそれら批判の背景的基盤として彼一流の、いわゆる弁証法的な〈概念〉理解を持っている。しかし夙に指摘されているように、彼の批判はフィヒテの前期著作しか視野に入

れておらず、本書の見解によれば、彼の批判はフィヒテ知識学の変遷を追いきれていない。『基礎』から無神論論争までの時期に、以降のフィヒテ哲学を貫徹する主要思想が明瞭に姿を現わすが、それは無神論論争の影響の下で変容を蒙り、中・後期知識学の基本特徴、「絶対知」と「絶対者」、生と思弁の対立・連関の関係に関わるものとして形を定めていく。ヘーゲルとフィヒテの「絶対知」論を対決させて、まずヘーゲルの側に立つなら、「絶対知」と「絶対的者」の区別、「絶対知」の「発生的」説明は、それ自身、自己自身を組織化し基礎づけるべき体系内部の欠陥を標示するものでしかない。一方、フィヒテの側に立つなら、このいわば自分自身へ生成する体系自身の実在性は、それを超越する絶対者との関連なしにその体系自身から導出され得ない。「絶対知」論におけるこの思索方向の乖離は、そのまま、超越論的自我論をひたすら思惟形式体系の自己生成の局面において展開する方向（ヘーゲル）と、絶対者との関連において超越論的自我の成立構造を反省的に探究する方向（フィヒテ）の乖離でもある。

第四章は、ヘーゲルにおける超越論的自我論の展開を、論理学における「概念」論のうちに追求する。カントの演繹論によれば、経験的認識は、「統覚」の論理的機能が感性的制約の下でカテゴリー的機能を果たすことによって可能となる。このカテゴリー的機能が「超越論的真理」、すなわち我々の対象への関わりを可能とし、「経験的」真偽を語り得る場所をあらかじめ開く。ヘーゲルの言う強い意味での「思惟」はまさにこの場所をかたち作るものであり、彼の論理学はその論理的結構を提示する。ヘーゲル論理学はその意味で、その全体が経験の成立を保証する「真理の論理学」である。そこで「客観的論理学」から「主観的論理学」への移行は「真理」「根拠」への回帰と意味づけられる。すなわちここでは、論理的形式が論理的内容を規定するという「絶対的形式」の思想の下で、カテゴリー的諸機能の背後でその内容限定を統御するものとして論理的諸機能が考えられている。ヘーゲル流の「形而上学的演繹」における回帰的循環によって、ヘーゲルは思惟の論理的形式とカテゴリーを絶対的に --- すなわちその反省的構造の彼岸に絶対者を追加することなく --- 基礎づけるようとしたのである。

第五章は、後期フィヒテの超越論的論理学講義（1812年）における超越論的自我論の展開を追求する。カントの超越論的自我論は初期知識学の絶対的自我論へ深化したが、絶対的自我はさらに後期の「像」論においてその主要部分を、無神論論争の証跡を残す超越的絶対者への配視の下で、変容させつつ、再生産する。自我の自己確認の場は事實的知であるが、前記講義は、我々の生の現場を形成するこの事實的知を出発点に取り、その可能性の制約を問うという叙

述方式の下で、それ故つまりは「像」の *possibilitas realis* を反省的に問い確かめる。フィヒテによれば、事實的知は存在の像とその像の像からなり、両者は不可分である。しかし像が像である限り、それはなんらかの存在の表出であり、そしてなんらかの存在とは、それ自身像である「原像」でしかあり得ない。

「原像」の表出とは、事實的知の現場で我々が見いだす像の質料的・総合的統一である。それは、我々が像の形式的統一（像としての統一性）を透過して無限の多様を生成として捉えるところに成立する。そこには知の反省性（生成するものにおいて自己を見いだす）の側面が含まれるが、それは、一方で、我々の生の反省的性格を根源的にかたち作る推論に従って、事實的知において自己を生成原理として確認するとともに、他方で、生成における〈外から由来するもの〉という性格を法則的必然性として内面的に見いだすことによって可能となる。現象の諸状態は自我によっては構成され得ないが、しかし構成不能なものとして構成される。事實的知において自我は自分を非自由へと形像するのである。

第六章は、観念論にまつわる意識内在主義の懸念を、そこに導く「表象」概念の批判的検討を介して払拭した。それによって、超越論的自我の機能する場所が我々の生のただ中に指摘され得る。根元哲学のうちには懐疑論の攻撃の手が届かない「表象」概念が含まれていた。それはフィヒテの非我論に繋がる着想であり、その概念の持つ豊かな可能性は、根元哲学を継承するフィヒテの論理学・形而上学講義のなかで「具体的概念」や対象の「切り取り」という用語で如実に示されている。それは、知と存在の相即性において我々の経験の現実を露呈させる概念である。そしてそうした経験の現実こそ、まさにヘーゲルとフィヒテの超越論的自我論が、超越論的自我の機能する場所として指し示していたものに他ならない。